

「日本宗教史像の再構築」第13回研究会／「古文書が語る中世の薬師寺」で報告

幡鎌一弘

10月24日(土)、京都大学人文科学研究所の共同研究「日本宗教史像の再構築」第13回研究会「寺社組織の近世化を問い直す」で「近世における宗教の世俗化を考える」と題して報告した。昨年末上梓した『寺社史料と近世社会』の二つある柱のうちのひとつが「世俗化論」であり、コーディネーターの上野大輔氏(慶応大学)からその点を提起してほしいということだったので、お引き受けした。

そもそも私が世俗化論にこだわり続けるのは、一つは近代と宗教(天理教と近代との関係がそもそもの出発点である)を考えると、とりわけ奈良・大和国ではかなり長い歴史のスパンで把握することが要請されたからである。もう一つは、近世・近代仏教史研究では真宗研究者の影響力が強く、逆に南都仏教は研究も研究者もなきに等しい。このため、理論化しなければとても太刀打ちできないからである。一寺院に即して史料を積み上げて議論をするスタンスでは、どうしても理論が上滑りしがちだが、他宗派を研究している人との交流によって議論が深まり、報告は大変有意義であった。寺院内部の機能分化、それに伴う官僚制の深化は、真宗でも坊官下間家の存在や学寮の創出などで指摘できることであり、南都仏教と比較すれば、「宗派」(教団)として議論すること自身が世俗化の論点たりうるのだと痛感した。

『寺社史料と近世社会』のもう一つの柱が史料論である。11月29日、薬師寺まほろば会館で行われた「古文書が語る中世の薬師寺」で「薬師寺の聖教目録・記録目録・宝物目録」と題して報告した(薬師寺宝物管理研究所山本潤氏と共同報告)。これは、東京大学史料編纂所の共同研究「薬師寺中世史料の研究」の成果報告会を兼ねた公開研究会である。宝物・聖教・記録の各目録の作成に注目し、近世の薬師寺が記録や什物をどのように管理してきたのかを明らかにした。とくに注目したいのは、天保期に記録目録を作ることに伴い、長いもので300年間書き継がれてきた法会の着到類が集められることで断絶し、それぞれが新たに書き起こされることになった点である。目録を作成すること自体寺院構造の変質を伴うものなのであり、目録を作成して寺宝を管理しようとする僧侶(官僚)の発想が、伝統を否定する合理性を持っていることを示唆している。世俗化と史料目録の作成は密接に関係しているのである。

Anthropology of Japan in Japan (AJJ) 2015年秋の大会で発表(11月28日)

澤井治郎

標記学術大会が11月28日から29日の2日間にわたって天理大学で開催された。Anthropology of Japan in Japan(以下AJJ)は、ホームページによれば、日本を人類学的に研究しようとする学者、特に日本在住の研究者に開かれた学会で、毎年秋に定期的な大会を開催し、春にはワークショップをひらいて

いる。言語は1998年の創設以来、慣習として英語が使われており、日本語を含む多言語の使用も認められているという。今回は、天理大学創立90周年の記念事業の一環として本学が大会のホスト校となって開催された。

大会のテーマは“Birth and Death in Japan— Meanings and Representation in Historical and Cross-Cultural Perspectives (日本社会における「生誕と死」—その意味と表象、歴史的・比較文化的視点から)”というもので、これが、今年度のおやさと研究所公開教学講座のテーマ「天理教と現代社会の生死観」と重なることから主催者の要請を受けて、当研究所からパネル発表を行うことになった。

研究所のパネル発表は第1日目の午後、“Tenrikyo’s Perspectives on Life and Death for the Contemporary Society”と題して、4人がそれぞれのテーマについての天理教の捉え方考え方を発表した。昼食時を利用しての本部神殿参拝で本教の信仰に興味をもった参加者の本教教理への注目度は高く、発表後フロアから多くの質問が寄せられ、活発な議論が交わされた。パネルの構成は以下の通りである。

- 澤井治郎: *Tanjō* 「誕生」, Birth
- 澤井義次: *Yamai* 「病い」, Illness
- 堀内みどり: *Oi* 「老い」, Growing Old
- 深谷耕治: *Shi* 「死」, Death
- (司会: 金子昭)

日本爬虫両棲類学会第54回大会で研究発表

佐藤孝則

12月5、6日の両日、標記学術大会が東邦大学習志野キャンパスで開催された。今回はポスター発表をおこない、演題は「奈良盆地の東山麓に分布する爬虫・両生類」とし、奈良市藤原台周辺に分布する爬虫類と両生類の現状を紹介した。ほぼ毎朝夕、同市古市町の平尾池と陸軍墓地を囲む道路上(周囲約1.5km)で調査し、轢死・捕獲個体をもとに分布状況を解析した。その結果、今日ではあまり見られなくなったシロマダラやジムグリ、ヒバカリなど6種類のヘビ類を確認できた。この発表に対して、ヘビ類の研究者からは「この狭いエリア内に6種も分布していたとは驚き」といった評価があった。またヘビ類の餌動物としてのカエル類との相互関係にも、関心が寄せられた。これらを含む詳細な結果は、来年2月の研究報告会で発表を予定。

そのほか今大会で目立ったのは、高校生が口頭発表を、中学生がポスター発表をおこなうなど、若い研究者の参加・発表が増えたことで、この分野の研究拡大を推し量ることができた。

「出前教学講座」申し込み受付

おやさと研究所では教区、教会などの単位で「出前教学講座」の依頼をお受けしています。詳細は、担当者佐藤孝則(tasato@sta.tenri-u.ac.jp)までお問い合わせ下さい。